

舌をかまずに

「統計」といいますと、すぐに数字を思い浮べてしまい、数字嫌いの人からいやがられてしまうのですが、事実、統計と数字とは切っても切れない関係にあります。統計表といえ、3桁ごとにくぎられた数字の羅列が目には浮んできません。

ところで、外国では数字を3桁ごとにくぎって数えていくのに対し、日本では4桁ごとにくぎって数えるという違いがあることはよく知られています。そこで今回はその点についてみてみましょう。まず表一をみてください。

表一 1

1	one	一
10	ten	十
100	hundred	百
1,000	thousand	千
10,000	ten thousand	万
100,000	hundred thousand	十万
1,000,000	million	百万
10,000,000	ten million	千万
100,000,000	hundred million	億
1,000,000,000	billion	十億
10,000,000,000	ten billion	百億
100,000,000,000	hundred billion	千億
1,000,000,000,000	trillion	兆

われわれにおなじみなのは、日本語でしたら兆、外国語では billion 程度まででしょう。

百万長者のことを英語で millionaire といいますが、最近のインフレで、この程度ではまだまだ、なんととっても億万長者 (billionaire) にならなくては金持ちではなくなりませんでした。

さて、それでは兆 (trillion) 以上の桁になった場合、どういうふうに表示するのでしょうか。表二をみてください。

表一 2

10^{15}	1,000,000,000,000,000	quadrillion	千兆
10^{16}	10,000,000,000,000,000	tenquadrillion	京 (けい)
10^{18}	1,000,000,000,000,000,000	quintillion	百京

以下

3桁ごと

4桁ごと

sextillion

垓 (がい)

septillion

杼 (じょ)

octillion

穰 (じょう)

溝 (こう)

澗 (かん)

正 (せい)

載 (さい)

極 (ごく)

恒河沙 (こうがしゃ)

阿曾祇 (あそうぎ)

那由他 (なゆた)

不可思議 (ふかしぎ)

無量大数 (むりょうたいすう)

どこまで知っていましたか。日本語での名称は、すべて仏教の中からとられています。

それにしても、日本語にしろ外国語であるにしろ、ずい分と面倒なものです。なんととっても数字で表わす簡潔さには歯がたちません。

インドで発見されたという「0」、これを応用できたか否かの差は大きいといわざるをえません。

では、表一3に1より小さい小数に対する読み方をあげますので、任意に数を考えていろいろと読み方を考えてみてください。舌をかまずにできればたいしたものです。

表一 3

0.1	分 (ふん)
0.01	厘 (り)
0.001	毫 (ごう)
0.0001	絲 (し)
0.00001	忽 (こつ)
0.000001	微 (び)
0.0000001	纖 (せん)
0.00000001	沙 (しゃ)
0.000000001	塵 (じん)
0.0000000001	埃 (あい)

(伊藤)

夢を登る (2)

ーガルワール・ヒマラヤ遠征隊ー

今日から、現地人80人をポーターに雇い6日をかけてB C (ベース・キャンプ) までのキャラバンが始まる。

カール峠に出て、ヒマラヤの高峰が目飛びこんでくる。緑深き山々の上にそれは白く輝いていた。出会う人々に「ナマステ」とあいさつする。子供も大人も一瞬キョトンとし、すぐに「ナマステ」と答えニコッと笑う。通じたうれしさから、老若男女かまわず次から次へとナマステの連発。果ては遠く畑仕事に忙しい人にまで大声で「オーイ。ナ・マ・ス・テ！」とばかりに。

ロハルケットに着く。早速抜ける様な青い空の下、水浴と洗濯をする。幸福を感じながら、水牛の様に喜々として……。サッパリした気分、キャラバンの最終到着を待つもなかなか来ない。そして、それは事故の報告とともにやってきた。他の谷出身の2人のポーターが4人の隊員の個人装備の一部(寝袋・セーター・下着・帽子、そして大切な酒やタバコまで)を盗みドロロンしてしまったのである。幸い、隊から何とか補充し、登山には支障をきたさなかったが、結局盗難品は戻らなかった。のちに掘り出し物として出廻るのではないかと思う。

2日目、ダクリ峠(2,505m)。午過ぎに着いたため、素晴らしいヒマラヤの展望は、帰りのキャラバンまでお預けとなった)を越え、マリの小学校(と言っても、机も何もなくガランとしていた)の庭にキャンプを張り、3日目、ワッチェンブリッジまで急降下し、逆に対岸を急登し、スングル・ドゥンガ河の右岸を高巻きの上下運動をしながら進む。ガルワール・ヒマラヤは、緑が多く日本の山に似ている一人で歩いていると日本の山を歩いている錯覚におちいってしまいそうである。しかし、産物は乏しく、青物といえば大きなキューリ(現地語でキーラ)のみで、キーラにこまやかな神経を示す私にとってはなほ嬉ばしくなかった。動物性タンパク源は、村々で買った羊のみである。現地食主体のメニューゆえ慣れるまで体重が軽くなっていったが、3日目の最終部落のジャトリに着いたころは、天性の順応性が発揮され食欲おう盛、体調はすこぶる良かった。大勢の人間がやってきたのが珍しいのであろう。大人も子供も我々に強い関心をもって見ている。身なりはみすばらしいが、瞳はヒマラヤの空の様に澄んでいる。カ

メラを向けると、インドのいづれとも同じく集まってくる。

4日目のドゥンガ・ダングを過ぎるとルートはスングル・ドゥンガの谷を歩く。いたる所の外壁から素晴らしい滝となって雪融け水が落ちている。正面にはマイクトリ(6,803m)の稜線が白く輝いている。スングル・ドゥンガ(3,200m)に着く。すぐに裏手の峠に向け高度順応のために3,600mまで登る。体調は良い。我々の隊には、高所医学研究のために隊付きのドクターが2人同行していた。我々も研究の一助をなすためキャラバンの初日から登山活動を通じ、帰りのキャラバン終了まで毎朝・行動中・毎夕と個人検診(自覚症状・体重・呼吸数・脈搏・血圧・体温など)をやり翌朝ドクターに提出していた。又協力者のみではあったが、排泄物の測定のため、常に尿カップをザックのサイドにつるし、バネ秤をザックにしはばせていた。バネ秤片手にヤブを分け入る姿やカップを見つめつつ、「今回は、〇〇cc出た。調子いいぞ！」などと言いつついる姿を、ポーター達は変な人種とばかりに我々を見ていたのではなかろうか。しかし我々は体調をチェックしつつ、タルコットの頂上へと歩を進めて行った。

キャラバン6日目。スキヤラム氷河に向け高度を上げて行く。パンツまで濡らしての渡渉も過ぎ、大きな岩壁の陰に着く。B C (3,800m)である。タルコットはガスのあい間に姿を現わす。非常に遠くに見え、一週間で落とせるだろうかと不安をもつ。ポーター達は、賃金(18ルピー。1ルピー≒30円)をもらい大声を上げて引き上げて行く。明日から、本格的な登山活動が始まるのである。



ベース・キャンプ設営にいそがしい (桧山)